

〈史料紹介〉

## アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著 『高貴なる用語の解説』 訳注（7）

谷 口 淳 一 編

### はじめに

本稿は、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー（Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-'Umari）著『高貴なる用語の解説』（*al-Ta'rif bi-al-muṣṭalaḥ al-ṣarīf* 以下『高貴なる用語』と略）のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿には、al-Droubiの校訂本167頁1行目から187頁末までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書とそのテキストなどに関しては、訳注（1）の「はじめに」を参照されたい。

今回訳出した範囲は、訳注（6）に引き続き「第2章 委任状、任命書、委託状、裁定書、布令、布告の慣例」の一部で、各役職の任命文書の本文に当たる指示部分（*waṣīya*）のうち、カーディーや説教師など宗教関係の役職に対する文例が示されている部分である。以下、記載順に各指示部分の内容を簡単に紹介しておく。

まず、カーディー（*qāḍī*）すなわち裁判官に対する指示部分が提示されている。当初マムルーク朝は、スンナ派4法学派のうちシャーフィイー派（al-Šāfi'i）に独占的な地位を認めていたが、やがて他の3法学派のカーディーも任命するようになった。おそらくそのような状況を反映して、まず全法学派のカーディーに共通する指示部分の文言が提示され、その後にシャーフィイー派、ハナフィー派（al-Ḥanafī），マーリク派（al-Mālikī），ハンバル派（al-Ḥanbalī）の順に、各法学派のカーディーに対する指示部分に追加される文言が示されている。共通の指示部分においては、「神の書」すなわち『クルアーン』と、神の使徒ムハンマドのスンナ（慣行）に基づき、イジュマー（合意）およびキヤース（類推、推論）によって裁定を下すというスンナ派法学の大原則が語られた後、公正な裁判を実施するために、証人や訴訟代理人などに十分用心すべきであるということが長々と述べられている。

各法学派のカーディーに対する追加文言は、それぞれの法学派の特徴が示されていて興味深い。シャーフィイー派のカーディーに対する追加文言では、まず同派のカーディーが4法学派の中で最上位を占めることが言及され、その後に国庫に対する訴えの審理、孤児の財産の保護、サダカ（自発的喜捨）の管理、地方の裁判官代理の任命といった任務が示されている。他の3法学派のカーディーに対しては、特有の学説など各法学派の特徴に言及したうえで、それぞれの主流学説に従って裁くよう指示されている。以上のカーディーとは別に、軍団のカーディー（*qāḍī al-'askar*）に対する指示部分が収められている。そこでは、軍団と行動を共にして兵士のために移動法廷を開くことが指示されている。

次に市場監督官（muḥtasib）に対する指示部分が収められている。カーディーに対する指示部分と同じく、最初に職務の概要、つまり善を命じ悪を禁じ不正を取り締まるという指示が記された後、造幣所の監督、詐欺行為を働きかねない各種集団の監視と処罰といった具体的な職務が列挙されている。

その次に収められている説教師（ḥaṭīb）に対する指示部分には、比喻がちりばめられた文章の中に、モスクでの説教によって人々を導くことと礼拝を指導することという二つの職務内容が示されている。つまり、この説教師とは導師（imām）を兼ねた存在であったということがわかる。

つづいてスーフィーたちを監督する大シャイフ（šayḥ al-šuyūḥ）に対する指示部分が示されている。長文に及ぶ指示部分の大半は、スーフィーたちが陥りがちな極端な行動や考え方を非難することに費やされており、大シャイフの最も重要な任務は、スーフィーたちが極端に走ることをないように彼らを監督することであったということが読み取れる。

シャリーフたるサイイド（預言者ムハンマドの子孫および一部の傍系親族）たちのナキーブ（naqīb al-sāda al-ašrāf）に対する指示部分も同様で、彼らの系譜の管理など実務的な内容はごく簡潔に述べられるだけで、紙幅の大半は、シャリーフの聖性を過度に強調する者たち、とくにシーア派諸派に対する批判と処罰の記述に割かれている。今回訳出した範囲には、以上の役職に対する10点の指示部分が収められている。

我々は、2003年7月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して、1年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し、『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は、2013年2月から2014年12月にかけて実施した計19回の例会（第107回～第125回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは、伊藤隆郎、岡本恵、近藤真美、篠田知暁、清水和裕、杉山雅樹、田中悠子、法貴遊、森山央朗、柳谷あゆみ、横内吾郎（五十音順）と谷口の12名である。各担当者が作成した訳文と注を例会で検討したうえで見直し、その修正案を研究会参加者に再度示して意見を求め、必要に応じて修正を重ねた。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

2007年度より2015年度まで、我々の研究会はNIHUプログラム「イスラーム地域研究」の活動の一部として実施しており、本稿はその研究成果の一部でもある。

なお、訳文中にある〔 〕は、校訂およびその底本であるL写本の頁の表示と、校訂テキストにない語句を補って訳した場合に用いた。また、原語のローマ字転写の際には、原則として辞書の見出しとなる形（名詞と形容詞は単数形主格、動詞は完了形3人称男性単数形）に直して示した。ただし、単数形にすると意味が変わってしまう語句などは、原文の形に即して転写した。

## 『高貴なる用語の解説』(7)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー

[txt. 167]

## 全ての法学派のカーディーに共通する指示部分

この職位は、そこへと訴訟 (qaḍiyya) が持ち込まれ、不平 (šakiyya) [の申し立て] が伝えられるよう神が定めたものであり、[ms. 74a] その職位に就く者はウラマーでなければならない。彼らは預言者たちの相続者であり、シャリーアによる裁きを司る者である。つまりカーディーは、神の預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——から知識を受け継いだのと同様に、裁定 (ḥukm) も受け継いだのである。彼の手中には裁定の端綱と、判決 (qaḍā') の決定権が握られるようになった。判決のいくつかは後に他の裁判官 (ḥakīm) に示されることもある。彼らは皆、両替商のように吟味し、一刀両断に<sup>1)</sup>裁定を下す。

裁定を下す前にその裁定について、審理の結果を告げる前に審理について熟考するように。そして、曖昧さがなくなるまで幾度も案件を調べ、熟考した後は、神の書、神の使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——のスンナ、イジュマー、キヤースに立ち戻るように。その後も曖昧なところがあれば、神に正しい導きを求めることで、その不明な点を明らかにするように。また人に相談してその問題を解明するように。相談することを自分の欠点だと考えてはならない。至高なる神はその使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——に相談することを命じた<sup>2)</sup>。父祖の昔より、努力にもかかわらず誤ってしまうことを避けるために相談する者がいた。何故なら、多大な努力を払っても余人にはできないことができる人がいるかもしれないからである。[txt. 168] また、年長の者が気付かなかったことを、年少の者が理解することもあるからである。それは、イブン・ウマル——神が二人に満足せんことを——がナツメヤシに気付いた通りである。彼は年少であるというだけで、作法の面から、年長の者に話しかけたりまわりついたりすることができなかった<sup>3)</sup>。

それから、真実 (al-ḥaqq) が明瞭になったなら、正当な権利を有する者に真実があると判決する。その者のためにそれをその場で記録し、正しい権利が確かであることについて、

1) nafād al-mašrafī. 直訳すると「マシュラフィーで突き刺すこと」。マシュラフィーとは剣の名称であるが、その由来については、産地名あるいは刀鍛冶名など諸説ある [Lane : 1539]。

2) 『クルアーン』42章38節の中で、神の許でよく報いられる者として、互いに相談してものごとを決める者が挙げられている。

3) ハディース (ブハーリー) : 1 巻59頁。預言者の質問に対して、その場で最年少であったことを理由にイブン・ウマルが答えるのを控えたが、その答えは預言者のものと同じであったというハディース。なお、イブン・ウマルとは、第2代正統カリフ=ウマル1世の息子 'Abd Allāh b. 'Umar b. al-Ḥaṭṭāb のこと。ハディース伝承者として知られている。73/693年、巡礼中に負った怪我がもとで死去 ["'Abd Allāh b. 'Umar b. al-Ḥaṭṭāb," EI2]。

正当な権利を有する者自身に証言させたいと、真実がその者にあると裁定する。そのような裁定を考えることで、最後の審判の日に歓喜することになろう。正当な権利を有する者のために真実を書いておけば、時を経てもそれはよく記憶に留まる。カーディーの手で書かれたものは永遠に残る。

視線の向け方に至るまで、訴訟当事者たちを平等に扱うように。認可するときも禁じるときも、真実に基づいて自らのあらゆる業務を行うように。〔ms. 74b〕偽りが入り込まないように、証人たちのことに厳しく目を配るように。証言を求めるときにはよく調べるように。多くのカーディーは短剣以外のもので屠られ、多くの証人は剣以外のもので殺されるのである。証人たちのうち、公正で知られ、私心の命じるところが自らの最強の敵であると考えていることが分かっている者のみが〔証人として〕認められる。それ以外の者は、通常、証言するような者ではなく、不正な金で糧を得ることに抵抗がなく、証言においては生きながら死んでいるのである。したがって、〔証人として〕受け入れても非難のないような者<sup>4)</sup>を受け入れるように。多くの公正はベルト（minṭaqa）と剣の隙間に、多くの不正は外套（faraḡiya）とターバンの中にある<sup>5)</sup>。発行される契約書をよく吟味するように。大半の契約書は、「水に侵蝕されてまさに潰れ落ちんばかりになっている川岸に」<sup>6)</sup>あり、疑義によってハッド刑は免れるとはいえ、姦通（sifāḥ）のような罪に陥り、恥が残ることがあるからである。

その言葉によってあらゆる者の正当な権利やあらゆる孤児の財に影響を及ぼし、その証言があらゆる重大な事にかかわるような鑑定人（šāhid al-qīma）は、いずれも財産があり、ものをよく知っている者のみにせよ。そのような者であれば、価値をよく知り、推測して誤る恐れがない。長い時の中で理解の鏡が経験で磨かれているからである。〔txt. 169〕以上、あらゆることについて真実を見過ごすことにならぬよう、時間をかけて対処するように。ただし、正当な権利を有する者が苛立ちを覚えるほど〔裁定を〕引き延ばしてはならない。自身の墓のために土をならすように<sup>7)</sup>。そのために、カーディーは証人の捕虜のような者ではあるが、そのことを言い訳にせず、自分自身が解放されるよう努めるように。

訴訟代理人（wakil）というものは避けられない災いであり、自分自身に有利な裁定が下されるように偽って〔訴訟を〕請け負い、依頼人を惑わせる悪魔である。必ずや、彼らには地獄が割り当てられる。カーディーの威光によって、彼らの考える邪な誘惑や恥知らずな悪事を退けるように。彼らのような者には一切利益を得させないように。〔ms. 75a〕〔彼らが利益を得たとしても、〕それは禁じられたものに他ならない。侵害の手を伸ばさせないように。

4) 校訂168頁10行目の miṭl の後の tā' marbūṭa は誤植。正しくは hā' である。

5) 前半の装束は軍人を、後半は文人を示している。文脈上は後半部分が重要で、文人には不正がつきものであるという意味か。

6) 『クルアーン』9章109節の一部。

7) 現世での行為によって天国に入れるよう準備するように、ということを伝えていると考えられる。

に。〔伸ばしたとしても、〕その手はその者の首に縛り付けられる<sup>8)</sup>か、切断されるだけである<sup>9)</sup>。正道ならぬ道を歩む〔代理人の〕使いの者がもたらす汚れをカーディーの門から清めるように。こういった連中は、1ディルハムでもみつけたら、〔それを〕自分のものにしようとし、火獄 (nār al-ḥariq) に落ちるのである。

その他に、彼のような者に〔わざわざ〕指示する必要のないものや、その職務の一つ一つを数え上げる必要のないものがある。〔実際〕それは数え切れないほどある。そのうちの一つが、彼の法学派に属す人々のワクフの事柄に対して全般的な監督をすることである。彼の素晴らしい監督によってワクフを豊かにするように。十分な監督は、単に雲がかかった場所<sup>10)</sup>よりも有益である。一部の者に優先権が与えられており、カーディーとの距離が様々である彼の部下 (ṭā'ifa) の心を把握するように。そうすれば、カーディーの監督によって、部下の間の足の引っ張り合いはなくなり、そのようなことをする者の傷はカーディーの言葉によって癒されるようになる。

この指示部分はカーディーに対する勸戒 (dikrā) として述べられた。神のおかげで、彼には指示されたことの何倍ものこと〔を実行する力〕がある。それゆえ、我らは彼を任命した。神に讃辞と称えあれ。また、我らは彼に、彼に等しい性質を持つ者や似た者、進んで彼の負担を引き受け、彼と〔来世での〕報酬を分かち合う者を補佐として任命する権限を与えた。至高なる神に対する畏れこそ、善を含むものである。[txt. 170] とりわけ、この職に就いている者や、根本的であれ周延的であれこの職を担っている者にとってはそうである。神に対する畏れは、掣肘なき権限を有する (muṭlaq al-taṣarruf) 裁定の主と代理人 (ḥalīfa) にとって不可欠である。

シャーフィイー派〔のカーディー〕に対しては、以下の文言が追加される

以下のことを知るように。彼は、座の上席 (ṣadr al-maḡlis) 〔を占める者〕であり、たとえ類似の者たちがいようとも、我らが座す場所に最も近い民 (qawm) である。また、彼はタイラサーン<sup>11)</sup>の着用者であり、あらゆる剣の人が彼に従い沈黙するのである。知識と敬虔さこそが彼を持ち上げ、俗世ではなく宗教ゆえに彼は上昇するということを自覚するように。そして、[ms. 75b] この恩寵の価値を正しく理解するように。その地位の内にとどまるように。その地位とは、その〔象徴である〕黒インクを選び抜きのラクダ<sup>12)</sup>と交換してでも手に入れたくなるものである。

8) 『クルアーン』17章29節にある「あなたの手を自分の首に縛り付けてはならない」という一節を踏まえた表現。なお、「手を自分の首に縛り付ける」とは、吝嗇であることを指す比喩表現である。

9) 手首の切断は、窃盗の罪に対する刑罰を表している。

10) 豊かな土地を指す比喩表現。

11) ṭaylasān. ターバンの上から肩にかけて覆う布。当時は、法学者やカーディーが着用することが多かった [Stillman 2000 : 71]。

12) ḥumr al-na'am. al-Droubi は "thoroughbred camels" と説明している [研究篇 : 207頁]。



さらに、彼に対する指示部分では、以下のように述べられる。

繁栄せる国庫に関する訴え (da'wā) と審理 (muḥākama) について。それらには、万民それぞれの権利<sup>13)</sup>が関わる。それらの訴訟では最大限の注意を払い、また、権利が求める保持、保全を実行するように。ムスリムから請け負った訴訟代理人の証拠をすべては認めないように。証拠には反証 (madfa') [の可能性] があるのだから。神の許で無害であると考えられる些細な案件は扱わないように。というのも、それには益が無いのだから。国庫にはいくつもの権利があるが、偽ってその一部をそこから手に入れようとする者は、必ずや厄災に見舞われる。「それはスルタンの財である」と言う権利が自分にあるとする輩の言うことは聞かないように。というのも、我ら（スルターン）といえども、人々のうちの一人分の取り分しか有していないからである。

孤児の財について。神は、孤児たちの財を食らう者に警告している<sup>14)</sup>。ただし、疑いを招くことなく、適切な〔使い方の〕場合は別であるが<sup>15)</sup>。孤児とは父が亡くなってしまった者であるが<sup>16)</sup>、なかには乳房に吸い付くことしかできない幼子もいれば、母親の腹の中の胎児もいるのである。したがって、後見人 (mutaḥaddit) たちには、孤児に対して良く振る舞うよう命じるように。〔さもなくば、〕[txt. 171] 自分たちが手にしているものを残して没した場合には、自分が孤児に対して行うのと同様のことが自分の子供たちにも起こるという報いを受けるであろうと、後見人たちに対して知らしめるように。自分の子供がいらない後見人たちには「もし自分の後にか弱い子孫を残すようなことになったら、その身を案じるであろうという者は、心配しておくように」[クルアーン：4章9節] と警告するように。

後見人たちに対して、同じような話題について先人たちの話を語り、思い起こさせるように。彼らに対してクルアーンを誦読し、至高なる神の次の言葉を思い出させるように。「孤児の財を不当に食らう者どもは、結局、火を食って自分の腹の中に入れていただけである。そのうち炎に焼かれることになる」[クルアーン：4章10節]。

サダカ<sup>17)</sup>について。それは彼の筆先に委ねられるが、彼の保護下にあっても役人が誠実でなければ蚕食される。[ms. 76a] [ゆえに、] サダカを適切に運営するために、それを受給する権利を有する人々に注意深く分配し、サダカの受領と支出において必要な事のみを注意深

13) ḥaqqu kulli fardin fardin min al-ḡumhūri. 校訂テキストでは下線部は f-r-d と綴られているが、この綴りでは文脈に合う語が見つからない。D1 と S2 以外の諸写本およびペイルート版156頁に従い、本注冒頭に掲げたように読んだ。

14) ḥaddara Allāhu man akala māla-hum (=al-aytām). 下線部を min akli māli-him と読み「神は…孤児たちの財を食らわぬように」と警告している」と訳すこともできる。前者の読みを示しているのは S1 写本 [f. 115b] で、後者は D1 [f. 106b], Sh [f. 92b] の2写本とペイルート版156頁に見られる。

15) 『クルアーン』4章6節では、後見人が貧しい場合は、彼が後見する孤児の財産を適度に使ってもよいとされている。

16) yatim は通常「孤児」と訳されるが、片親だけがいる場合も含む。イスラーム法では、父親がいらない孤児が保護の対象として重視された [「孤児」『岩波イスラーム辞典』]。

17) ṣadaqa. 自発的な喜捨。義務としての喜捨であるザカートと区別される [「サダカ」『岩波イスラーム辞典』]。

く実行するように。

彼の法学派のみで扱われ、それに対処することが重視されており、その法学派では質問に対する神の回答が用意されている問題について。そうした問題については、以下の場合を除いて特殊な説 (marḡūḥ) に基づいて対処しないように。すなわち、イマーム (シャーフィイー) 自身の法学説がある場合、数多くの同派の者たちが従っている場合、先達の知識人 (ahl al-ilm) がある特殊な説を重視し、賛同者を求めるがゆえにその説に基づいて裁定を下したのを知っている場合を除いて。

地方の裁判官代理 (nā'ib al-barr) について。〔その職務には〕適性が確証された人物のみを任命するように。というのも、大半が知識を持たないムスリムたちに対して、その人物を任じることになるからである。彼らには知識をもつ者がひどく欠けている。すなわち、慣れ親しんでいるべき宗教や節度が欠けているのである。節度があれば、彼らでも貧困から来る苦汁を嘗めながらそれを甘いと思うだろう。それから、常にこの代理たちを監視するように。人は、鍵のかかった箱のごとく、任につくまでは何者か分からないのだから。[txt. 172]

ハナフィー派〔のカーディー〕に対しては、以下の文言が追加される

以下のことを知るように。彼のイマーム (アブー・ハニーファ) は最初に法学 (fiqh) をまとめ、先行し、後に従うウラマーたちの先駆者となった。アブー・ハニーファとその一派の者たちには、独特の学説がある。マーリクが見解を異にした問題もある。マーリクはアブー・ハニーファの後に最初に現れ、彼に先行する人物よりも輝かしい。それらの問題の中で最も重要なものの一つは、幼い女子を嫁がせる際に、相応の配偶者によって保護することである。これは、彼女たちに対する大罪を恐れてのことである。また、隣地の先買権がある。もしこれが彼らの見解でなかったのなら、意に反して悪意の隣人から安全とはならず、恐ろしいことを予期して、家族とともに自分の屋敷で穏やかな時間<sup>18)</sup>を過ごすこともないだろう。

同様に、ある女性が待婚期間中 (mu'tadd) で、彼女と離婚した相手によって囚われているような場合の扶養費 (nafaqa) 〔の問題〕がある<sup>19)</sup>。たとえ彼女が前夫との絆から切り離されていても [ms. 76b]、彼が彼女の扶養費を払わないままであり、一方、彼女は、彼女の扶養費を自身の財産から払う男性と結婚できないままである場合〔彼女には扶養費の請求権がある〕。

18) 校訂テキストでは dahran とあるが、誤植であろう。底本をはじめとする諸写本およびペイルート版157頁に従って al-dahr と読む。

19) ハナフィー派では他の3法学派と異なり、取消不能な離婚により待婚期間に服する妻は、特に理性を備え成年に達しムスリムで自由人の女性の場合、離婚成立時の住居に居住する義務を負う。そしてこの状態にある女性に対して扶養請求権を認めている〔柳橋博之 2002: 307-308頁〕。「彼女と離婚した相手によって囚われている」とは、このように離婚成立時の住居に居住することを強いられている状態を指すのであろう。

また、財産を借りてそれを浪費し、支払い不能 (i'sār) を訴え、その証拠を偽造し、それが聞き入れられることを望み、牢に入らず、このことで困難に遭うこともなかった者〔の問題〕がある。アブー・ハニーファの法学派の人々は、まずその者を投獄し、しばらく留めることを支持する。その後、彼は証拠があると訴え、それが提示されたとする。さて、それは採用されるか否か。

このことやこれに類する、全般的な正しさと全体的な<sup>20)</sup>利益があり罪とならないことについては、その全てについてそれを担当 (ra'a) したときは、彼の法学派の説に従って裁くように。これらの見解についてもそれ以外についても、彼のイマーム＝アブー・ハニーファの昇る月と、彼の輝かしい星々とによって導かれるように。[txt. 173]

彼の法学派の人々である法学者たちに対して親切にするように。彼らの多くは離郷して彼の許へ訪れ<sup>21)</sup>、昼の鳥は彼らを連れて隼の旋回しない彼の頭上を旋回し、夜の翼は鳥が飛べないところ〔を飛んだ〕<sup>22)</sup>。そして彼らは、権利が数え挙げられればその権利が考慮される、遠く離れた土地と広範な援助を、その背後に残して来たのである。アブー・ハニーファを学祖とすることが<sup>23)</sup>、彼と彼らをその法学派に集わせる。そして彼のような人で、反抗と関係付けられる者はいない。

マーリク派〔のカーディー〕に対しては、以下の文言が追加される

彼の法学派は、不信仰者に対して鞘から抜かれた剣を持つ。それは〔彼の法学派が〕血を飛び散らせて勝利を得た、その相手の血で塗られている。卑しき地位の度を越えて、神の預言者たち——神の祝福が彼らにあらんことを——に醜惡な言葉でもって抗った者は、法学派の抜身の剣で殺され、マーリク派に固有の彼の学説 (qawl) によって、自由裁量刑 (ta'zīr) としてその血が流されるのである。彼の法学派の剣は、彼らに対してその刃を露わにし続け、容赦 (fusha) のないマーリクの法学派から火獄の門番である天使マーリク<sup>24)</sup>へと彼らを引き渡し続ける。[ms. 77a] こうすることの目的には、目に入ったごみのごとき宗教の背信者たちを一掃することがある。これらの者たちの血が飛び散らない限り、高き誉れ (al-šaraf

20) 'amīm. この語を 'azīm (大きな) とする写本もある [校訂：172頁注21]。

21) 校訂テキストには adnā (近づける) とあるが、L 写本他をもとに addā と読んだ。

22) 校訂者は、ウマリーが al-Buḥturi の以下の詩句に言及しているのではないかと推測している [研究篇：207－208頁]。

夜は鳥の色の中にありてあたかも / それがその漆黒の中にあるかのよう、たとえ啼くことはなくとも

23) 校訂テキストには abū-hu Abū Ḥanīfa とあるが、諸写本から ubūwat Abi Ḥanīfa と読む。なお「集わせ」と訳した動詞は、校訂テキストでは yağma'u とあり、主語は男性名詞となる。しかし写本では、D 1 [f. 108a] で下に2点書かれている例を除き、何れも主語の性を特定するために必要となる最初の文字の弁別点が書かれていない。

24) Mālik ḥāzin al-nār. 『クルアーン』は、「彼らにその（火獄の）門番 (ḥazana) が言った」[39章71節] や、「彼らにその番人が尋ねた」[67章8節] という記述が示すように、火獄には門番が配されていると述べている。マーリクとは、Ibn Ishāq によって伝えられている、この門番を務める天使の名前である [ムハンマド伝 1：420－421頁]。



al-rafi') は危害から安全ではないのである<sup>25)</sup>。

ただ我らは彼に、見落としたものがあっても修正する〔必要も〕ない明らかな証拠をもった確定 (ṭubūt) のみを求めるように指示する。まことに彼は生きも死にもする〔神ならぬ身の〕男にすぎないのだから。したがって、判決を下す前に時間をかけるように。証人たちを不適格な者であるとする確定や憎悪による<sup>26)</sup>〔告白や証言〕であるとする確定がありうる場合には、彼らを赦すように。〔彼らの〕破滅を急がないため、不備が正されないまま急いで結論を出さないために。

同様に我らは [txt. 174] 指示する。彼らに対していったんしっかりと決定したならば破棄しないように。さらに同じく我らは指示する。自分に権利があるもの以外、禁じられた血を流さないように。同じく、書き付けのみの証言を採用しないように。いったん破棄された文書を復活させないように。則を越えたものを大目にみないように。これが人々に容赦を与える方策であり、害のない快適さを与える方策である。ただし、この、証拠による確定は、審議継続のためであって、棄却をしたり、証拠のみで罰金刑を科すものではない。

彼が担う (ra'ā) ところの、指示を受ける者 (waṣīy) の任務 (wilāya) はかくのごとくである。これは余人ではなく彼が担うものであり、それは公益のためである。そうでなければ何が指示 (waṣīya) であるというのか。その任務とは、シャリーアの諸事において、指示にあるような事柄の遵守 (murā'āt) を妨げるものをいっそう警戒することである。

このこと以外では、例えばいったん売却されてから戻すことになったワクフの収入を差し止めて、売買すべきでなかった期間の〔ワクフ収入の〕金額を買い手が手に入れることを妨げるようなことである。これが、同様の案件に対して彼が下す判決であり、あえてワクフを売った者は罰として、その売却〔してから返還されるまでの〕期間のワクフの収入を手に入れられない (iḥrām) ものとする。

これら以外にも、〔彼が扱う案件には〕慣行<sup>27)</sup>に基づくものがあり、また話すときは真実に基づいて話し、裁くときは公正に行うべきものがある。

この学派の法学者は、この地方においては、数が少ない。彼らはよそ者であるから、彼らの居場所を良くするように。彼の寛大さを彼らの住む場所に示すように。[ms. 77b] 彼の庇護の下で彼らに旅を終えさせ、休息を得させるように<sup>28)</sup>。彼らは遠路はるばるやってきて、旅という最も激しい戦いの苦労に疲れ切っているのだから。彼らに親切にして祖国を忘れさせ、西方を思っただけでなく流れる涙<sup>29)</sup>を彼らの目頭に浮かばせないように。

25) al-Mutanabbī に以下の詩句があり、これを参照したもの〔研究篇：208頁〕。

非常な高貴さは危害から安全ではない／その周りに血が流されるまでは

26) 校訂テキストには ba'dan とあるが、校訂注19およびバイルート版158頁に従い baḡdā' と読んで訳した。

27) 'amal. マーリク派における地域の法的な「慣行」を指す言葉 [堀井聡江 2004：73-79頁]。

28) li-yastaqirra bi-him al-nawā. Dozy [v. 2：748] に「旅の終わりが彼に休息を与えた」との訳文があり、ここではカーディーに対する指示であるという文脈を踏まえ、上記の訳文とした。

29) dam'an yafīḍu 'alā al-ḡarbi. al-ḡarb には「西方」の他に、「涙」という意味がある [Lane：

ハンバル派〔のカーディー〕に対しては、以下の文言が追加される

優先される重要事項は、以下の通りである。

彼は、彼の法学派の人々に対して起こった中傷や、彼らが投げかけられた言葉を知っている。そうした言葉については、その中に含まれている害悪<sup>30)</sup>のために、我々はそれを放棄する。[txt. 175] そして、その学派の道を歩む者がその言葉に躓くことのないよう、彼がそうした言葉の痕跡を一掃し、そうした言葉の害を彼の法学派の道から除去するということに、我々は満足する。また、至高なる神はその様態 (kayfa) が知られている。神について問う者は、剣によってではなく、様態で応答されるのである。

皆が同意するところ (ġamā'a) に所属し、孤立せぬよう警戒すること。字義 (zāhir) は含意 (murād) とは違ふと信じて、属性を示すクルアーンの章句については通説に従うこと。暗闇から光へとハンバル派の者たちを連れ出し、解釈が不可欠なことについて解釈すること。例えば主<sup>31)</sup> (rabb) について「彼はどこに居るのか」と問われて「天に」と答えた女奴隷のハディース<sup>31)</sup>のように。さもなければ、神の方向性を肯定すること (itbāt al-ġiha) によって、試練の場において災難が降りかかることになる。というのも〔神の方向性を認めてしまえば、神が〕その方向から発生することが必然となるが、誉れ高き至高なる神は永遠であり、発生するものでもなければ発生のための場もないからである<sup>32)</sup>。

クルアーンの中の言葉についても同様である。とはいえ我々は口頭であれ書面であれ、それについて議論 (takallama) する者に警告する。口頭で述べた者に対しては鞭打ち以外に報いは無く、書面で述べた者には死以外に〔報いは〕無い<sup>33)</sup>。この後に、無知な者たちを抑え込み、議論をするに至らずとも、迷える思考に反論する者は、彼の学派の諸事について検討し、彼のイマーム (イブン・ハンバル) および同派の者たち——イマームと同時代の者も後代の者も——から正しく伝えられたもの全てに則って行動するのである。

イブン・ハンバル——神が彼に慈悲をかけんことを——は人々が座視していたあの時期に

2242]。この部分はこの二つの意味を掛けた表現であると考え、単に「西方を思って流れる涙」とするのではなく、「涙の上を流れる涙」という表現の訳出のために「止めどなく」を補った。

30) 校訂では mu'ādāt (敵意) となっているが、諸写本およびペイルート版159頁に従い bašā'a (害悪) と読んだ。

31) Abū Dāwūd の *Sunan* および Ibn Ḥanbal の *Musnad* にこのハディースが収録されている [研究篇: 208頁]。ただしハディースでは「主」ではなく「神 (Allāh)」と明記されている。

32) 神の位置や方向性に関するクルアーンの表現は、字義通り擬人的に捉えてはならないというのが多数派の見解である。しかしハンバル派の Ibn Taymiya は神の方向性についての表現を字義通りに認めることを主張し、論争を呼んでいた。Ibn Ḡahbar al-Kilābi が論駁書 *Radd madhab Ibn Taymiya fī itbāt al-ġiha* を書いており、*Ṭabaqāt/Subkī* [v. 9: 35–91] にその全文が収録されている [Asmā'/Haddad 1999: 89]。この指示部分はそうした論争を踏まえたものであると考えられる。イブン・タイミーヤが擬人神観を持つとして非難されたことについては以下を参照 [“Ibn Taymiyya,” EI2; シャリーアによる統治: 9頁]。

33) 校訂テキストには illā sawṭun bi-al-ḥarfi illā ḥatfun とあるが、諸写本およびペイルート版159頁に従い bi-al-ḥarfi の前に wa を補って読んだ。

立ち上がった真理のイマームであった。〔ms. 78a〕彼はミフナ<sup>34)</sup>の際に、タイム家の主人<sup>35)</sup>——神が彼に満足せんことを——がリッダ<sup>36)</sup>の際に占めていた立場に立った。南の強風<sup>37)</sup>が吹いたが、マリースィー<sup>38)</sup>という暴風が彼を<sup>39)</sup>動じさせることはなかった。イブン・アビー・ドゥアード<sup>40)</sup>は彼の許にあらゆる雌駱駝 (dawd) を集め、いたる所から良い雄駱駝 (‘is) を連れてきたが、彼も〔イブン・ハンバルを動じさせることは〕なかった。〔txt. 176〕マームーン<sup>41)</sup>が彼の兄弟への指示の中で提案した取り決めも、彼の誓約を破らせることはなかった。また、ムータスィム<sup>42)</sup>の鞭は彼に苦痛を引き起こしたが、彼を恐れさせることはなかった。ワースィク<sup>43)</sup>の剣も同様であった。

イブン・ハンバルの事跡に従い、彼の『ムスナド』<sup>44)</sup>を通してその学説の全てか大半を学ぶように。彼の言葉と清純な同派の者たちが選択した<sup>45)</sup>ものに従って判決を下すように。このような情報が伝わっていない場合には彼らに従うように。信仰のために、以下の問題に注意するように。収益を上げなくなったワクフを売却し、その代金で類似のものに買い替えることや、ワクフ受益者のためになるものとの交換。婚姻解消 (fash) が可能となるだけの期間不在で、扶養費を残さずに妻を放置し、離婚未成立の女性 (mu‘allaqa) であるかのように、妻を婚姻状態のままで見捨てた者の婚姻を解消すること。離婚された女性という裁定が継続するような条件によって婚姻解消が成立した後に女性が結婚できるように、彼女を完全に離婚させること。また隣人に危害を加えることを禁じているものや、「害することも仕返すすることもない」<sup>46)</sup>という預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——の言葉から派生

34) miḥna. アッバース朝初期に行われた異端審問。第7代カリフ＝マームーン（在位189～218/813～833年）に始まり、第10代カリフ＝ムタワッキル（在位232～247/847～861年）の時代に終わる〔「ミフナ」『岩波イスラーム辞典』〕。

35) sayyid Taym. 初代正統カリフのアブー・バクル（在位11～13/632～634年）のことを指す。タイム家はクライシュ族の一氏族である〔「アブー・バクル」『岩波イスラーム辞典』〕。

36) ridda. 預言者ムハンマド没後に生じたアラビア半島の諸部族の背教。アブー・バクルの指導のもと、収束に向かった〔「リッダ」『岩波イスラーム辞典』〕。

37) スビアとアスワーンの間位置するマリース (Maris) という村の方面から吹く風のことを指す。この風は伝染病をもたらすことで知られている〔研究篇：208頁；“al-Marīs,” EI2〕。

38) al-Marīsī. ムルジア派の神学者。218/833年没〔“Bishr b. Ghiyāth al-Marīsī,” EI2〕。

39) 校訂テキストにはないが、全ての写本には bi-hi があるので補った。

40) Aḥmad Ibn Abī Du‘ād. 240/854年没。ムータズィラ派神学者にしてカーディー。イブン・ハンバルに対するミフナで中心的な役割を担った〔“Aḥmad b. Abī Du‘ād,” EI2〕。

41) al-Ma‘mūn. アッバース朝第7代カリフ。在位189～218/813～833年。

42) al-Mu‘taṣīm. アッバース朝第8代カリフ。在位218～227/833～842年。

43) al-Wāṭiq. アッバース朝第9代カリフ。在位227～232/842～847年。

44) *Musnad*. Ibn Ḥanbal が編纂したハディース集で、イスナード（伝承経路）によってハディースを分類している。彼の『ムスナド』はスンナ派では非常に信憑性が高いものと見なされている〔「ムスナド」『岩波イスラーム辞典』〕。

45) iḥtāra. イブン・ハンバルは後世、『クルアーン』とスンナの精神に最も適合すると判断される学説の「選択 (iḥtiyār)」を行ったと見なされた。また、14世紀に活躍したハンバル派法学者 Ibn Qayyim はイブン・ハンバルに帰されるべき正統な学説を確定するためにも「選択」を行っている〔堀井聡江 2004：111, 203頁〕。

46) Ibn Māga の *Sunan* に収録されているハディース〔研究篇：209頁〕。

するものにも〔注意するように〕。彼の法学派以外の者であっても、自分自身に対して設定するワクフについて〔注意するように〕。彼によってウラマーという新月が現れたのだが、もし彼らがいなかったなら、時代が暗闇を晴らすことはなかったであろう。

たとえイブン・ハンバルが必要であると考えなかったとしても、弱者の負担を軽減する根拠となる災禍についても同様である。そのような災禍については、義務の示すところに従って調停するしかない。また、もし許可しなければ、多くの人々が明白に禁止されたものにしか手を出せなくなり、契約した者が種を播き〔ms. 78b〕土地を耕しても収穫の分け前を得られないことになってしまうような契約についても同様である。その他、人々を結びつけ、人々の生活の糧や方便のためになるようなイブン・ハンバルの言葉〔の解釈についても同様である〕。根本（aṣl）が定まれば、分枝（farʿ）はついてくるものである。〔txt. 177〕

その学派の法学者たちは、得るものが少なくワクフも貧弱であるため貧しく、スィカーフ<sup>47)</sup>で補正されなくてはならない槍のように心許ない状況にある。彼らを満足させ、目の前にいようといまいと彼らの望みを大きくしてやれ。彼らが欲するような厚意で彼らを包め。そうすれば、彼らの富への欲求は少なくなり、彼らの学徒は多くなる。

#### 軍団のカーディー<sup>48)</sup>の場合

一人しかいない場合は、軍団から独立した職務につくカーディー（qāḍī al-ʿamal al-mustaqill）のように指示部分書かれるのではなく、おそらくは以下の如くであろう。

彼は、ただ剣（兵士）に関する案件が裁かれ、軍営に係争当事者たちが集まる場合のみの裁定者である。そのペンは鋭く、一筆ごとに血を震わせる。その台帳は執行を命じるものであり、舞い上がった埃〔のごとき訴え〕をまるで書き物のように天の巻物として巻き上げ〔決着をつけ〕ている<sup>49)</sup>。

彼に持ち込まれる問題の多くは、このウンマ以前には誰にも認められていなかった戦利品、協業契約、特に分割が必要な契約、売却、特に売却後の瑕疵の賠償、期日を越えた債務、特に債務者不在のまま裁定が下される債務に関してである。それらはすべて、審理に長い時間をかけられず、神の支援を受けし兵士がジハードに携わることを妨げるものである。即座に裁定を下し、抜き身の剣（兵士）がジハードの場に急ぐよう、それらの問題に備えるように。神の支援を受けし軍団は、この故国では殉教の徒であり、彼らの中には怪我をしても〔ms. 79a〕損をせず、むしろ儲かる者がいるのだと知るように。したがって、明らかに受け入れられる者を受け入れ、拒絶することが害にならない者でも、神の下では受け入れられているのだから、拒絶しないように。〔txt. 178〕

テントが張られた時には、軍営（muʿaskar）に、そこに行けば彼がいる周知の場所を

47) ṭiqāf. 曲がった槍や弓を補正する鉄製ないし木製の器具 [Lane : 343]。

48) qāḍī al-ʿaskar.

49) 『クルアーン』21章104節を踏まえた表現と思われる。



設けるように。行軍中は、彼が歩く位置を定めてそこで裁判を行うように。〔最もよく知られている〕<sup>50)</sup>位置は旗の右手である。移動している時も留まっている時もこれ続けるように。これに違反して、要件を抱えている者たちを困惑させてはならない。彼はカイロのサーリヒーヤ〔学院〕にいたのでもシャーム（ダマスカス）のアーディリーヤ〔学院〕<sup>51)</sup>にいたのでもないのだから。

人々のために書類を作成する書記たちを同伴するように。さもなくば、どこに〔書類を作成してくれる〕証人たちが見つかるだろう。そして権利者のためにその権利を記録するように。さもなくば、否認の門は閉じられないだろう。神への畏れとは、兵团がそれによって支援されるものである。それが戦争の旗（‘alam）の上にある最も高いものでない限り<sup>52)</sup>、さもなくば、軍旗（band）を広げる必要はない。

### 市場監督官<sup>53)</sup>に対する指示部分

彼はこの職位の権限を掌握し、至高なる神のためにムスリムたちの福利をその眼で監督する権限を、市場監督官の職務<sup>54)</sup>として与えられた。よって以下のことを監督するように。些細なことと重大なことを、頻繁なことと希少なことを、計量可能なものと不可能なものを、善として命じられたこと、もしくは悪として禁じられたことを<sup>55)</sup>、買われるものと売られるものを、正確に測ることが楽園に近づけ火獄から遠ざける——たとえ火獄との間はもはや1バー<sup>56)</sup>か1ズィラー<sup>57)</sup>しか残っていなかったとしても——ものを、昼であろうと夜であろうと営まれる生活の全てを、天秤の舌が話すか升の口が語らぬ限り量が知られないものの全てを。

彼はその際に、それぞれの行為を公正にし、〔ms. 79b〕いくつかの基準が提示された時、誰が不正を働き誰が公正であったかを定める標準器として働くように。それらの原因を可能

50) ašhar. 校訂テキストでは脱落しているが諸写本より補った。

51) 校訂者は、al-Šālihiya はカイロからダマスカスへ向かう途中にあるエジプトの村、al-‘Ādiliya はおそらくダマスカスの郊外かどこかの地名であろうとしている〔研究篇：209–210頁〕。しかし両者は、カイロとダマスカスの著名な学院のことであろう。マムルーク朝中期の歴史家マクリーズィーは、カイロのサーリヒーヤ学院でカーディーが裁判を行っていたことをエジプト地誌の中に記録している〔*Ḥiṭaṭ*, v. 3 : 254〕。また、15–16世紀のシリアで活動したヌアイミーは、マムルーク朝時代のダマスカスのアーディリーヤ学院に関する記事の中で、カーディーがそこで裁判を行っていたと述べている〔*Dāris*, v. 1 : 363–366〕。

52) 難解な箇所。校訂テキストでは a’lā の語末を alif mamdūda で表記しているが、正書法上無理がある。ここでは alif maqṣūra で比較級として読んだが、底本から a’lāman takūnu と読む可能性も指摘したい。この場合、神への畏れが「戦争の旗の上に立つ旗でない限り」という訳になる。

53) muḥtasib.

54) ḥisba. 校訂テキストでは ḥasaba-hu とあるが、これでは直前の文末にある rutba（職位）と脚韻を踏むことができない。

55) ヒスバとは元来、「善を命じ悪を禁じる」というムスリムの宗教義務のことを意味した。

56) bā’. 尋。両手を広げた長さで約2メートル〔Hinz 1970 : 54〕。

57) dirā’. 腕尺。時代と地域によって相違するが、al-Qalqaṣandi の時代（14世紀後半～15世紀初頭）のカイロでは約58センチ〔Hinz 1970 : 56〕。



な限り精査し、ごまかしに対して警告を発するように。病気の大半は食べ物か飲み物が原因なのだから。[txt. 179]

それぞれの市場で、人々に知らせることも気づかせることもなく、物価を調べ情報を求めるように。彼の監督を代行し、彼が不在でもその者がいれば市場が落ち着く者を補佐 (amin) として、彼らの上に立てるように。そして解決が困難なことは彼に知らせ、〔解決が〕可能であっても彼に意見を求めるよう、その者に命じるように。市場監督官の如き者の見解は、より優れているものだから。

造幣所 (dār al-ḍarb) と〔そこで造られ〕流通する貨幣には、かなり後にならないと明らかにならない虚偽があるかもしれない。萎縮することのない心をもって、その重要事に当たるように。貨幣すなわち粗悪品を許さないもの、砕いた金鉱石 (dahab maksūr) から精錬され<sup>58)</sup>、銀〔との化合物〕から精錬されて (rawbaṣa) 出てくるもの、また、不純物<sup>59)</sup>の一部ではなくすべてを火が溶かし込んでしまったものを、彼の目で試金石によって調べるように。〔以上のことに対しては、〕<sup>60)</sup>彼の代理として監視員 (raqīb) を置くように。太陽のような金<sup>きん</sup>に対して、カメレオンが太陽を監視するがごとくに<sup>61)</sup>監視する人物を置くように。

香料商 (aṭṭār) と大道医者<sup>62)</sup>の奇妙な薬の販売については、保証人<sup>63)</sup>をつけるように。ただし、それらの者たちが、いかがわしくなく、知られた人物であり、また、熟練した医療従事者 (mutaṭabbib) による患者への処方箋がある場合は除く。

大道医者<sup>64)</sup>や占星術師 (ahl al-niğāma)、その他サーサーンの徒<sup>65)</sup>に関係するあらゆる集団、人々の財貨を手練手管で奪い取り、舌先三寸で人々を食い物にする輩、この種の邪悪な人間は皆、実のところ悪魔であって人間ではない。彼らを完全に禁圧し、修復不可能なまでにガラスを割るかのごとく<sup>66)</sup>、彼らを粉碎せよ。[ms. 80a] 見せしめの罰を彼らに科せ。そうしなければ、指導的懲罰や平手打ちだけでは、彼らの指導に役立たない。これらの邪悪なものをすべてを断ち、浅はかな人々を惹きつけるこれら手垢のついた手口<sup>67)</sup>を禁じよ。[txt. 180]

58) 'allaqa. この語が「精錬する」という意味で用いられることについては、Ehrenkreutz 1953 [p. 428, n. 6] を参照せよ。

59) liḥām. 「溶接」「ハンダ付け」または「ハンダ」そのものを意味する語であるが、そのような意味では文意が通りにくい。仮に、金に混じる「不純物」と解しておく。

60) 校訂テキストではこの部分に相当する語句が欠けているが、諸写本およびペイルート版163頁には当該箇所「alay-hi (その上に) とあるので補って訳した。

61) カメレオン (ḥirbā) は、常に太陽の方を向いているため、太陽の監視者とされる [Lane : 541]。

62) ṭurqīya. 路上で医療行為をしたり薬品を売ったりする者を意味する ṭurqī [Dozy, v. 2 : 39] の集合名詞形であろう。

63) ḍummān. ḍāmin の複数形 [Dozy, v. 2 : 14]

64) 校訂テキストでは al-ṭarīqa とあるが、諸写本およびペイルート版163頁に従い al-ṭurqīya と読んだ。

65) sāsān. いかさま師。物乞いや詐欺を生業とする人々をこのように呼んだ ["Sāsān, Banū," EI2]。

66) 諺を踏まえた表現 [研究篇 : 211頁]。

67) 「手口」と訳した語は、校訂テキストでは al-asālib となっているが、諸写本およびペイルート版163頁に従い al-asbāb と読んだ。

ムスリムを騙したり、欺いて銀貨を得たり、買い手<sup>68)</sup>に〔額を〕つり上げて示したり、慣習による定め (ma'hūd al-'awā'id) を逸脱したりしたことを汝が見つけた者については、その人物をその地において広く知らせ、その者が耐えられなくなるまで、それらの道具をその者のうなじに載せよ<sup>69)</sup>。

これらの者ども以外に、マクタブ教師<sup>70)</sup>や女の学者<sup>71)</sup>に加えて、ガゼルと子牛の群に害を与えるオオカミ<sup>72)</sup>として恐れられるさまざな者、上記のことやそれに類したこと、警戒されていることのすべてを大胆にも行うさまざな者がいる。これらの者に汝の矢を射掛け、汝の大胆さで彼らの足元を揺るがせ。信頼と安心 (ṣiyāna) がおけることが確認された者以外に対しては、〔取り締まりを〕怠るな。

〔市場監督官の〕代理 (nā'ib) については、首尾よく実行する人物で、彼を代理に任じたことが汝にとって報酬として計上され、「誰を代理に任命したのか」と尋ねられれば「この者です」と言える者でなければ、満足してはならない。神に対する畏れは、なんとよい道であることか。マーリクの法学説に従って実践する場合を除き、我らが語ったことのすべて、いやその大部分が汝の管轄となる<sup>73)</sup>。

### 説教師<sup>74)</sup>に対する指示部分

その〔象徴である〕木の頂<sup>75)</sup>が彼のために高められ、またその迎えの良馬が説教壇 (minbar) から彼の許へ差し向けられる職位に昇るように。最も高い所<sup>76)</sup>へと昇るように。

68) 「買い手」と訳した語は、校訂テキストおよび諸写本では muštaran (購入品) と綴られているが、そのままでは意味が理解しづらい。したがって、ペイルート版163頁に従い、muštariyan と読んだ。

69) 不正に用いた道具を掲げさせ、晒し者にするということであろう。犯罪者を晒し者にすること (tašhīr / taḡrīs) は、市場監督官が科す刑罰の一つであった [Tyan 1960 : 650]。マリーヌ朝下のフェスでは、不正を行った者の名前とその製品が公表されたり、その製品と共に不正者が市中を引き回されたりした [Le Tourneau 1961 : 105–106]。

70) faqīh al-maktab. マクタブとは kuttāb と呼ばれ、読み書きなどを教えた初等教育施設である。ファキーフまたは mu'allim と呼ばれたマクタブ教師の社会的な評価は一般に高くなく、無能で貪欲な人物が就く職として軽蔑されることもあった [池田修 1986 : 122–125頁]。また、市場監督官の業務に教師や医師の監督が含まれることについては、マーワルディーの法学書にも見える [統治の諸規則 : 613頁]。

71) 'ālimat al-nisā'. 不詳。女子に教える女性教師のことか。

72) ガゼル (zaby) と子牛 (ḡu'dār) は若い男女の喩えであり、オオカミ (dī'b) は若者に危害を加える人物を表している。

73) 難解な一節。文頭の mā を関係代名詞として訳出したが、この語を否定辞と考えることもできる。その場合、訳文は「マーリクの法学説に従って実践する場合は、…管轄となる」となり、全体として正反対の意味になる。なお、748/1347–48年にハナフィー派の人物が就任するまで、マムルーク朝下のカイロの市場監督官はシャーフイー派がほぼ独占し、他の法学派としてはマーリク派が1名知られているだけである [菊池忠純 1983 : 表2]。

74) ḥaṭīb.

75) 説教壇と、説教師が説教の際に手に持つ木の剣 (または杖) は「二つの木 ('ūdāni)」と呼ばれ、説教師のシンボルとされている [“ḥaṭīb,” EI2]。

76) daraḡa. ここでの daraḡa は、「説教壇の階段」と「地位」の両方を指していると考えられる。

輝く一日の夜明けから彼のために鞍が置かれていたかのような、馬の背に乗る幸運を手に入れるように。この高貴なる職位の務めと〔説教壇の〕頂を守るように。その頂は彼と同じような礼拝指導者 (imām), あるいはカリフのためだけに準備されたものである。[ms. 80b] 頭上で旗がはためく場所に立ち、語りかけるように。そうすれば、雄弁な舌は沈黙し、筆はインク壺の口で乾くであろう。

約束と警告を耳に響かせるように。そして「心ある者、また耳を傾ける者、注視する者」[クルアーン：50章37節] に神の日々を想起させるように。[txt. 181] [人々の] 硬い心を柔らかくするように。たとえ、その中に石や鉄よりも硬い心があったとしても<sup>77)</sup>。〔彼自身が〕人前に現れる前に、人々が彼の前に既に来ているようにせよ。語る前に悔悛の鎧を身に着けるように。場に適した話を選んで聴衆に語りかけ<sup>78)</sup>、それによってあらゆる心から外れることのない矢の狙いをつけるように。主を畏れ、畏怖が彼の心から奪い去られることを危惧する者として、ミフラーブに立つように。

以下のことを知るように。その貝殻 (ṣadafa) のようなミフラーブが彼という隠された<sup>79)</sup> 真珠の如きものから分かつたことはなく、宝石箱〔のようなミフラーブ〕が彼という蓄えられた宝石の如きものを覆い隠してしまうこともない。そこに集まった多くの人々を導くように。彼らの前に現れるように。彼こそが前に立つべき人 (safir) なのだから。そして、この宗教的義務を行うように。それは〔信仰の〕最も偉大な柱の一つであり、秤にかけられる<sup>80)</sup> 諸々の行為のうちで第一のものである。また、それは最も敬虔な行為の一つであり、アザーンの度にムアズズィン (dā'i) が〔信徒を〕そこへ集める。〔決まった〕時間に礼拝するように。また、定められた時間の最初に礼拝によって人々の心を安らかにするように<sup>81)</sup>。礼拝の完遂によって〔人々の心を〕軽くするように。彼の後ろにいる者たちに先んじて責務を全うするように。というのも、彼は礼拝指導者たるイマームだからである。

説教師はどんな決意 ('aqd nīya) をするときも、またどんな問題を前にするときも、常に敬虔さが必要とされる。〔そうすれば、〕至高なる神は次のような者に彼を加えるであろう。すなわち、神にふさわしい民の方へ心安らかに向かい、また最後の審判の日には慈愛あまねき御方の右側に、公正なるイマームたちと同様に、彼のために光でできた説教壇<sup>82)</sup> が設置される者に。[ms. 81a] 神の恩顧と寛大さによって。

77) 『クルアーン』2章74節の「あなたがたの心は岩のように硬くなった。いやそれよりも硬くなった」を踏まえた表現 [研究篇：211頁]。

78) 諺を基にした表現 [研究篇：211頁]。

79) 校訂本では makūna となっているが、諸写本やベイルート版164頁に従い、maknūna と読んだ。

80) 最後の審判において、ある人物の現世での善行が秤にかけられて、その者の来世が決定されることを指す。なお、最後の審判における秤について、『クルアーン』では23章102節など複数箇所で言及されている。

81) Ibn Ḥanbal の *Musnad* に収められたハディースを基にした表現 [研究篇：211頁]。

82) Ibn Ḥanbal の *Musnad* や al-Nasā'ī の *Sunan* に収められたハディースを基にした表現 [研究篇：211-212頁]。

大シャイフ<sup>83)</sup>に対する指示部分

汝は当代における模範であり、人類の手本である。汝によってこそ指導 (waṣāyā) [「というもの」] がなされ、汝の許でこそ矯め難い生来の気質 (saḡāyā) もよく教育される。汝という模範は天上の祝福であり、何人もこれ以上それは不要であるなどとは思わない。またそれは神の働きであり、何人もそれを数え尽すことはできない。またそれは光り輝くランプ (miškāt anwār) であり、[txt. 182] ズィクルを唱えるべき時と場所 (miqāt) であり、自発的に行われる勤めの時間——その時間は「夜であっても」常に昼となる——であり、信仰上の努力 (iḡtihād) がうち立てられるべきものの土台である。されば汝は衣の裾をたくし上げたままにして<sup>84)</sup>、「昼間の始めと終わりに、そして宵の口に、必ず礼拝を守れ」[クルアーン：11章114節]。

汝の集団を、汝が諸事を備えるときのやり方に従わせ、「彼らに神の日々を思い出させよ<sup>85)</sup>。この中には、忍耐強く感謝の念深き者すべてへのみしるしがある」[クルアーン：14章5節]。常に神を畏れ、神の前で互いに兄弟であり続けよ<sup>86)</sup>。汝のごとき者はそのすべてが善なのであり、その影が薄くなることのない雲である。この場所において汝の許にいる者はみな、汝にとっては兄弟であり、神を畏れることにおいて汝を助けてくれる者たちである。彼らはみな、1本の幹にまとめられ、そこから枝々が分かれ出ている木のようなものである。されば汝は先達 (ahl al-sābiqa) の権利を認めよ。汝以外のいったい誰から、その承認 (ʿirfān) を求められようか。

ライラーという〔女性の〕名を聞いただけで、そう呼ばれる当の本人のことを知りもしないのに熱愛してしまう者の目を開かせてやるがよい<sup>87)</sup>。目的を遠ざけるものゆえに、その者は途方に暮れて立ち尽くし、彼女のリサーム<sup>88)</sup>のせいで彼女に口づけることができないと考えて、彼女の美しさに関しては自分の目が節穴であるとも知らずに、〔彼女が身にまとっている〕ヒジャーブが原因であると思いつこんでいる。されば汝は、彼らの病める心を癒し、長く閉じられていた彼らの顔を眠りから覚ませ。彼らと彼らの家に親切にし、[ms. 81b] 汝が

83) ṣayḥ al-ṣuyūḥ. スーフィーの道において高い地位を占める人物に対する尊称。アイユーブ朝からマムルーク朝にかけての時代には、この尊称は厳密には、Ṣalāḥ al-Dīn によりカイロに建設されたハーンカー・サラヒーヤ (al-Hānqāh al-Ṣalāhiya) の長に対して用いられるものであり、saʿid al-suʿadāʾ とも呼称された [ペイルート版：165頁注1]。

84) 「衣の裾をたくし上げる (ṣammara dayla)」は、熱意をもって行動するの意 [Lane：1595]。

85) 校訂テキストにおいては、この部分を『クルアーン』からの引用には含めていないが、実際にはこの部分とこれに続く1文が、共に『クルアーン』14章5節からの引用である。なお、『クルアーン』において、「彼らに神の日々を思い出させよ」は神が預言者モーセに与えた指示であり、「彼ら」とはモーセの率いる民を指している。

86) 校訂テキストの「あり続けよ」に相当する箇所は dawām となっているが、誤植であろう。底本およびペイルート版165頁に従い、dawīm と読んだ。

87) ここでいうライラーという女性への情熱とは、スーフィズムにおける神への愛を喩えたものである。

88) litām. 顔の下半分（目の下から顎まで）を覆う布。

彼らの大地であることに満足せよ。

義務以上の勤め<sup>89)</sup>を放棄していると汝が見る者は、その者の両目の上に不眠の行の継続が宗教的義務となっているのを見るまでは放置するな。新しく入った者を、ある状態から別の状態への移行においてしっかりと教育し、その者を宵の口から、夜のマントが擦り切れて<sup>90)</sup>彼が体を起こすときまで目覚めさせておけ。

門弟（murīd）たちの階梯分けは、彼らの理解力がどれほどのもので、彼らの日々がどれほど力の衣<sup>91)</sup>を包んでいるかに応じて行うこと。汝は、あらゆる力をもってしても飲むことができない杯に、焦って手をつけぬよう注意せよ。また多くの人々にとっては、それを覆い隠すヒジャブから離れて立っているのがせいぜいである真実を、明らかにせぬよう注意せよ。[txt. 183]

汝の許に〔今〕いる者、あるいはこれから来る者皆に、神の書の朗誦と彼の使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——のスナを〔遵守〕させるように。この二つは尊重されるべきものであり、この両者をもって自らの心に糧を与え、満たされている者にとっては、この両者で十分だからである。この二つの道を辿らずして神に至る道なく、この二つに導かれる者以外が正しき導きを得ることはない。したがって、汝は両者とともにあらねばならず、両者は道（minhāg）にして法（šir'a）なのである。全ての新しきものには、くれぐれも気をつけよ。新しきものはいずれも誤りであり、誤りはいずれも逸脱だからである<sup>92)</sup>。よって、神へ至る手段として両者を汝のものとせよ。そして両者以外のものを遠ざけるように命じよ。シャリーアと食い違う真実在<sup>93)</sup>はいずれも無効であることが、ウンマの合意となっているからである。

我らが陥ることがないように神に保護を求めるような合一<sup>94)</sup>、あるいは宿り<sup>95)</sup>に傾倒する者、預言者たち——神の祝福が彼らにあらんことを——の〔示す〕道以外によって神へと至ることができると主張する者は、汝がそのような者を拒絶し、非難するよりもまず剣をもってそのような者に対処せよ。心に不信仰がまだ浸み込んではおらず、証明しようと思考をもてあそんだりはしていない者であれば、その者には悔悛し神へ赦しを乞うように諭せ。神が自ら

89) nāfila. 『クルアーン』においては、「神からの重ねての贈り物」[21章72節]、あるいは「自発的に夜間に寝ずに礼拝にいそむこと」[17章79節]という意味で登場する言葉であり、ハディースにおいては、主に後者の意味で用いられる。後に「規定の勤め（sunna mu'akkada）」に対応する概念である「追加の勤め（sunna za'ida）」の意味で用いられるようになり、特に「義務とされる以上の礼拝（ṣalāt al-nāfila）」の意味で用いられる [“Nāfila,” EI2]。

90) 「夜が明けて朝になる」の意味に解釈した。

91) muṭraf al-qūwa. 門弟たちが身につけた能力の喩えか。

92) al-Nasā'i, Ibn Ḥanbal, Abū Dāwūd のハディース集にある表現を踏まえたもの [研究篇：212頁]。

93) ḥaqīqa. 修行によって自我が消滅した状態で認識できるようになる真理または実在 [「ハキーカー」『岩波イスラーム辞典』]。

94) ittihād. 神と人間との神秘的合一を意味する用語 [「イッティハード」『岩波イスラーム辞典』]。校訂183頁の ittihād は誤植。

95) ḥulūl. 「受肉」「落入」とも訳される。スーフィーの人性が神の属性を帯びることを指す [「フルール」『岩波イスラーム辞典』]。



の預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——に命じたことを行うようにその者を諭せ。言え、「汝らの神は〔ms. 82a〕唯一の神。彼の他に神はない。彼に高き誉れあれ。彼は唯一にして征服者たる神である」<sup>96)</sup>と。

以下のことをしっかりと知るように。すなわち、以上のような者のことは明白<sup>97)</sup>であり、また似通っている。彼らは神の唯一性をことさらに言うが、多神教 (širk) に陥ってしまっている。それというのも、すべてを唯一の神とみなそうとして、唯一の神を複数の神としてしまっているからである。「それは酩酊<sup>98)</sup>のうちに発される酔語<sup>99)</sup>である」と主張したり、周囲からそのように言われている者は、汝を偽っているのではなく、真実を述べているのであるが、〔txt. 184〕本人を酔わせているものの名残のうちにあるか、不信仰にとらわれているのである。「自分たちは神を熱愛する者 (‘āšiq) だ」と言う者もいるかもしれないが、それも嘘を言っているのではない。その言葉自体は、一般論としては受け入れられるものであるが、その行動については偽りなのである。このような誤った集団に属する者には、慈愛に満ちた情けをかけないように気を付けよ。つまり、彼らの内面の悪さについて知り、彼らについての汝の考えを欺くことのないように気をつけよ。彼らのことについてはしっかりと対応せよ。悪魔の誘惑に汝が苦しめられているのであれば、石打たれる悪魔から救ってくれるように神に求めよ<sup>100)</sup>。

この集団にふさわしくないのに (min ġayri ahli-hā) 入った者、あるいは〔守ると〕約束したことを違えた者については、その者のためによき集会 (multaqā) をしてはならない。またその者を上の段階 (murtaqā) に上らせてはならない。このような者を誰一人として忍耐<sup>101)</sup>〔の段階〕へと導いてはならない。「いやいや、もし約束を果たし、神を畏れかしこむ者であれば」〔クルアーン：3章76節〕〔話は違うのだが〕。

汝は人々の長であり、彼らのよきラクダ (naġib) は「遠路はるばる」〔クルアーン：22章27節〕汝の許に押し寄せ、彼らのラクダは、道という道 (al-ṭariqa wa-al-ṭariq) を通って汝の許に到着する。それゆえ、彼らの集会のために寛容なる汝の心を更に広くせよ。彼らを歓待するために親しき汝の温情をより豊かにせよ。また、以下のことを知るように。朝、到来者のための居場所と休憩所が汝の家にある〔べき〕ことを。寛大者<sup>102)</sup>の属性 (ṣifa) を持つ者として創造された者にとって、来客を拒むことは恥ずべき行為であることを。汝の門の前に立つ、あるいは清貧の弊衣 (ḥirqa) によって汝と結びついているどのようなスーフィー<sup>103)</sup>

96) 『クルアーン』から三つの句 (18章110節, 9章31節, 39章4節等) が引用されている。

97) 校訂183頁の bayyin-hu は誤植。正しくは bayyina。

98) sukr. 神との合一に没頭しているスーフィーの心的状態のこと [「スクル」『岩波イスラーム辞典』]。

99) ṣaṭḥa. スーフィーが、忘我の状態に達した時に発する言葉 [「シャタハート」『岩波イスラーム辞典』]。

100) 『クルアーン』7章200節を踏まえた表現。

101) ḥilm. 特に怒りを抑え込むこと。

102) al-karim. 神の美称の一つ。

103) 校訂者が注15で示しているように、底本およびB写本 [f. 64a] において faqīr (スーフィー)

に対しても、早急にその入室を許可せよ。〔ms. 82b〕到達（wuṣūl）に近づいたという吉報と同様の汝の喜びをその者に示せ。汝らは、万事が神への絶対的信頼（tawakkul）に立脚する者たちである。ゆえに、神への絶対的信頼と意図とに基づいて以上のことを行え。彼が旅の杖を置いて、その旅を終えられる<sup>104)</sup>ように、彼の杖（‘ukkāz）を受け取り、敷物を広げるよう命じよ。〔txt. 185〕この外来者のごとき者が、もし汝の許にいる者とともに分け前にあずかれないならば、よそ者は汝の許に来ないだろうし、「よそ者にとって、あらゆるよそ者は親類である」<sup>105)</sup>という言葉の類は、彼にとっても〔ほかの〕よそ者たちにとっても真でなくなるだろう。それゆえ、彼は絶えることのないこのサダカの類から収入を得る。とはいえ、彼は神への絶対的信頼なくして汝の許を訪れることはない。「神を絶対的に信頼する者は、神だけで足りる」〔クルアーン：65章3節〕。

残りの関連すること、語るべきこと、汝を特徴づけることは<sup>106)</sup>、称讃に値するズィクルの勤めという早朝と夕方の外套である。汝の敬虔な行為は人々の口の端に上っている。また、たとえ不平の対象者〔たる汝〕が不平を言う者〔たる夜〕に親愛の情を抱いていようとも、汝が行う深夜の礼拝（tahaḡḡud）に、夜は不平を訴える。汝ゆえに、穢れなき行為は競われる<sup>107)</sup>。見る者全ての目は汝を模範とする。もし汝がいなければ、すすり泣く者や泣こうとする者もない<sup>108)</sup>。神への畏れとともに<sup>109)</sup>秘義（laṭīfat al-sirr）が表れ、また主を畏れる者たちは朝にやってくる。「主を畏れる者たちには、幾重にも積みあげられた館が与えられる。その下には河川が流れている」〔クルアーン：39章20節〕。神への畏れは汝の心の滋養であり、汝の愛の活力である。神への畏れにこそ汝と真理（神）とのつながりと、汝が汝の主に到達するための入り口がある。我らは、忘我（waḡd）への誘惑（nāzīga）から汝を遠ざけるためにこそ、神への畏れを語るのである。その誘惑の香りは汝の心とともにまさに飛び立たんとしている<sup>110)</sup>。

---

となっているこの箇所は、そのほかの写本では musāfir（旅人）となっている。

104) ジャーヒリーヤ時代の詩人 Mu'aqqir b. Aws の詩を踏まえた表現〔研究篇：213頁〕。詩的表現であるため意識をしているが、原文では主語は彼ではなく「彼が遠く旅先にあること（ḡurbat-hu）」である。

105) ジャーヒリーヤ時代の詩人 Imru' al-Qays の詩の一節〔研究篇：213–214頁〕。

106) 校訂テキストでは bi-hi min が欠落しているが、バイルート版167頁や底本をはじめとする各写本に従い補った。

107) あるいは、al-zāki が al-'amal を修飾するものと考えずに、「汝ゆえに、穢れなき者は行為を競う」と訳すか。

108) さまざまな信仰行為に際して、自らの罪を自覚し、神を畏れて涙を流すことは、スンナとして認められている敬虔な行為である〔“Bakkā,” EI2〕。

109) 校訂テキストでは bi-himā となっているが、bi-hā の誤植である。

110) ウマイヤ朝末期からアッバース朝初期に活動した詩人 Ibn al-Dumayna の詩を踏まえた表現〔研究篇：214頁〕。

シャリーフたるサイドたち<sup>111)</sup>のナキーブ<sup>112)</sup>に対する指示部分

僭越ながら、我々がそれを述べるという祝福を享受し、その秘奥に精通したとき汝が幸せになることのみ、我々は汝に指示する。汝の一族（シャリーフたち）は汝の一族である。〔ms. 83a〕汝が責任を有するシャリーフたちの諸事に関しては、神と汝の父祖であるその使徒——神が彼に祝福と平安を与えんことを——に従うように。そして彼らを手厚く扱え。彼らこそは、獅子と乙女たる<sup>113)</sup>、汝の母と汝の父の子供たちである。その高貴さにより増長したふるまいを見せ、反抗へと手を伸ばしたと汝が知った〔なら、その〕者の手を止めよ。

以下のことを知るように。シャリーフもシャリーフならざる者も (al-šarīf wa al-mašrūf) も〔txt. 186〕イスラームにおいては同等である。ただし、不正にふるまう者は別である。また、行いは記録され、それから神の御前に開帳されるということを。ゆえに明日汝が喜ぶことを今日のうちにせよ。逸脱を除け。〔その逸脱こそ〕シャリーフの聖性<sup>114)</sup>について度を越して〔強調する〕者たち<sup>115)</sup>と、彼らの先祖たちが非難せざるを得ないようなことを高く評価する者たちの拠り所である。それは、以下のように知られているためである。正しき先人 (salaf) ——神が彼らに満足せんことを——は、悪しき性質を持つ後代の人 (ḥalaf) が、彼らの間にあると主張するその分裂 (iftirāq dāt) を超越していた。そして後代の〔一部の〕者たちが、死の戦場へ導くものに逸れていくのである。

シーア派には、〔本来〕語られるべきではないが〔実際には〕語られている言葉という誤りがある。この門を、知性をもって封鎖せよ。彼らの信条の広がりを超つことに熟練した技を見せよ。手に剣を持って、彼らを禁ずる説教師として立て。あらゆる矢が当たるといふ、汝からの大打撃を彼らに恐れさせよ。そうすれば「最善の務めのために来たれ」<sup>116)</sup>などと、クルアーン、スンナ、イジュマーより善きものがあるかのように呼びかけることはない。それら三つに基づくよう汝の民に呼ばれることで、人々の集いの首飾りをつなぎ止めよ。

111) sayyid šarīf. 預言者ムハンマドの直系子孫および一部の傍系親族に対する一般的尊称。サイドの原義は「主人」、シャリーフという語自体の意味は「高貴な〔者〕」。いずれか一方だけを用いることも多い〔「サイド」「シャリーフ」『岩波イスラーム辞典』〕。

112) naqīb al-sāda al-ašraf. サイド（シャリーフ）を代表する者。9世紀半ばに制度化され、スンナ派・シーア派のいずれにおいても重きをなした〔「ナキーブ」『岩波イスラーム辞典』〕。

113) ḥaydara wa-al-batūl. 預言者の従弟‘Alī b. Abī Ṭālibと預言者の娘 Fāṭimaの夫妻を指す〔“ḥaydar,” EI2; Lane: 150〕。

114) walā’. 本来の語意は「近しさ、親しさ」で、同語根のワラーヤ (walāya) とほぼ同義ととっている。「近しさ、親しさ」全般を意味するこの語は、神秘主義においては神の友としての「近しさ」ひいては「聖者性」を意味し、シーア派思想においては預言者ムハンマドに対してその従弟・女婿であるアリー・ブン・アビー・ターリブが有した特権的な「近しさ」を指すこともある〔「ワラーヤ」『岩波イスラーム辞典』；菊地達也 2009: 37–38頁〕。ここではシャリーフがその家系故に有する神や預言者に対する「近しさ」を特別な権威や力の根拠とする考えを踏まえ「聖性」とした。

115) 度を越して強調する者たち (ahl al-gulūw) は、シーア派の極端派を指したもの。極端派については、『高貴なる用語』〔校訂: 141頁〕で言及されている〔訳注 (5): 13頁〕。

116) シーア派はアザーンの際に、スンナ派の用いない、この言葉を挿入する。

以下のような者〔に教えてやれ〕。すなわち、ムータズィラ派を祖と仰ぐ者。さらなる言説を費やしてザイド派への傾倒を示す者。過去のイマームたち——彼らに平安があらんことを——について、これまでイマーム自身が主張したことの無いようなことを主張する者。イマーム派の道において、彼らが始めた新奇なことに従う者。彼ら<sup>117)</sup>の言うところのサーディクに基づいて<sup>118)</sup>虚偽を語る者。彼らの告知者<sup>119)</sup>の言葉を用いて、自分の言いたいことを語る者。「彼らから秘事を教えられた。その奥義は、彼らがウンマから秘匿し、それに至る愉みをウンマから隠し通したものである」と語る者。[ms. 83b] サキーファで起きたこと<sup>120)</sup>やラクダの戦い<sup>121)</sup>について伝承されている情報 (ḥabar) とは異なったことを語る者。「アブド・シャムス〔家〕<sup>122)</sup>はハーシム家のために火獄に墜とされた」などと語る者の言葉を故事成句として語る者。内面的な (バーティン) 信条から〔クルアーンの〕字義 (ザーヒル) を理解する者<sup>123)</sup>。「本質をもつ実体 (al-ḡāt al-qā'ima bi-al-ma'nā) は様々な現れ方をする」<sup>124)</sup>と語る者。隠れたイマームへの期待に凝り固まった者。「蜜と水の流れるラドワー山<sup>125)</sup>に」<sup>126)</sup>立つ者<sup>127)</sup>を待ち続ける者。[txt. 187]「旗印を先頭に騎馬隊を率いる」者<sup>128)</sup>のため地下室 (sirdāb) に自分の馬をつなぎ留める者。アリー——神が彼の顔を気高くなさんことを——が雲中に居ると思って見回す者<sup>129)</sup>。イマームの条件として無謬性を主張して、知性の繋ぎ紐が外れた者。そのような輩の全てに教えてやれ。それらはみな彼らの心根の腐敗であり、彼らの悪しき

117) 以下の三つの文に現れる「彼ら」はシーア派を指す。

118) 底本 (L 写本) およびペイルート版168頁に従い ṣādiq-hum と直す。研究編215頁では、ṣādiq が十二イマーム派第6代イマーム Ġa'far al-Ṣādiq を意図しているとする。ṣādiq は「真実を語る者」の意味である。またジャーファル・サーディクは、十二イマーム派法学の祖と見なされている。

119) nāṭiq. イスマーイール派の教義において、人類史に存在する七つの周期のうち、各周期に現れる大預言者のこと。各周期には7人のイマームが存在し、その最後のイマームが次の周期の「告知者 (大預言者)」となるとされる。[「イスマーイール派」『岩波イスラーム辞典』; “Ismā'īliya,” EI2]

120) Yawm al-Saqifa. Abū Bakr がカリフに選出されたことを指す。

121) [Yawm]al-Ġamal. 36/656年に生じた 'Alī の軍と、'Ā'īsa, Zubayr, Ṭalḥa の3教友の軍による戦い。

122) 'Abd Šams. ここでは事実上ウマイヤ家を指す。

123) zāhir はクルアーンの字義どおりの解釈, bāṭin は比喩的解釈 (ta'wīl) から引き出された「隠れた内面の」意味を示し、これを重視するイスマーイール派をバーティン派とも呼ぶ [「バーティン」『岩波イスラーム辞典』]。

124) Ibn al-'Arabi の存在一性論などを意識した言葉か。

125) Raḡwā. メディナ近郊の山。

126) 「蜜と水の流れるラドワー山に」と次行の「旗印を先頭に騎馬隊を率いる」は Kutayyir 'Azza の詩句からの引用 [研究篇: 216頁]。

127) 'Alī b. Abī Ṭalīb の息子 Muḥammad b. al-Ḥanafiya のこと。al-Muḥṭār の乱ののちに、ムフタルの思想を継承したカイサーン派の概念である [ペイルート版: 169頁注2]。

128) 第12代イマーム al-Muntazar を意味する。ムンタザルは、サーマッラーにあった父の家の地下室に籠もって「隠れ」の状態に入ったため「地下室の主 (ṣāḥib al-sirdāb)」と呼ばれる [ペイルート版: 169頁注3]。

129) ヌサイリー派, アラウィー派はアリーの居所が雲の中にあるとしている [ペイルート版: 169頁注4]。

宗教信条であると。まさに、彼らは、この高貴な家の人々に近づく際に求める道を誤ったのであり、もし「彼らは〔正しく〕求めたのだ」と言う者があれば、言ってやれ。「いや、そうではない。〔彼らの所業が〕、その心を錆びつかせたのである」〔クルアーン：83章14節〕と。

彼らの系譜の事々について、疑いの余地がないように、また系譜外の者が一人も紛れ込めないように、また理由なく系譜から外れる者がないように、監督せよ。彼らのあらゆる会計の際に、その財産を執行する者に立ち会え。彼らの血脈全てを憶え保護せよ (ḥafīza)。

汝は、次のことに最も相応しい者である。高貴な〔預言者の〕ハディースのイスナードを中傷したり、ハディースを語った者（預言者）——神が彼に祝福と平安を与えんことを——の意図に基づかずにハディースを解説する者をよく矯正し、彼らに神と神の使徒に至る近道を示すことにである。

真理への反抗に加担し、恐怖ゆえに不正な (bāṭil) 集団に転んだと、汝が知った者を罰せよ。その者は、悪意を胸に秘め、その悪意ゆえに、至高なる神の知において前提となること、すなわち、先立つ人を先に出すということ<sup>130)</sup>を、怒りにまかせてねじ曲げた。また、その者は、汝が既に手本として道をいくつか示したにもかかわらず、迷ってしまったのである。もし彼らが矢軸<sup>131)</sup>をつたって鏃の闘争<sup>132)</sup>に手を伸ばしたら、彼らを押しとどめよ。彼らを遠ざけよ。彼らの分派は、その数がいかに増えようとも、全てが迷妄の暗黒の中で踏み迷っているのである。

結ぶにも解くにも〔いかなる場合でも〕神への畏れを捧げよ。高貴なるシャリーアに従って行動せよ。シャリーアは、紐が結びつけられた綱<sup>133)</sup>なのである。至高なる神は、〔神の〕近くの (fī al-zulfa) 最も高貴な〔ms. 84a〕場所に汝を持ち上げ、汝のために栄光 ('izz) の天幕を張るだろう。雷は、その天幕に自分の頬を見せると恥じらい、雲は、自らの天蓋をその天幕の上に伸ばすと、消えてしまう。

130) 校訂では、fī taqdim man taqaddama（先立つ人を先に出すことにおいて）となっているが、ペイルート版では、min taqdim man taqaddama となっている。ここでは、学問における主流からの逸脱を戒めるという文脈に沿って、ペイルート版に従った。また、校訂の当該部分〔187頁〕の注11も、複数の写本が、fī（おいて）ではなく、min（すなわち）としていることを注記している。

131) qidh（矢軸）には「誹謗」という意味もある。

132) niṣāl（鏃）と niḍāl（闘争）で韻を踏んだ表現。

133) sabab（綱）には「原因」という意味もあり、ここではシャリーアがあらゆる事柄の根元であることを、ḥabl（紐）にかけて表現している。



## 参考文献および略称

### 『高貴なる用語の解説』活字本

al-'Umari, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *al-Ta'rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. (『高貴なる用語』)

校訂: *al-Ta'rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-'Umari*. (Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Ta'rīf bi'l-muṣṭalaḥ al-šarīf"*.) Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu'ta University, 1992.

ペイルート版: *al-Ta'rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1988.

### 『高貴なる用語の解説』写本

B : Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1 : Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

D2 : Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

F : Ms. Arabe 5872. Bibliothèque Nationale, Paris.

L : Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig. (底本)

Ld : Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1 : Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2 : Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh : Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

### 『高貴なる用語の解説』訳注

訳注（1）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（1）」『史窓』67号（2010年）：27－65頁。

訳注（2）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（2）」『史窓』68号（2011年）：51－94頁。

訳注（3）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（3）」『史窓』69号（2012年）：19－53頁。

訳注（4）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（4）」『史窓』70号（2013年）：31－49頁。

訳注（5）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（5）」『史窓』71号（2014年）：1－24頁。

訳注（6）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（6）」『史窓』72号（2015年）：63－79頁。

### 辞典類

岩波イスラーム辞典：大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2002年。

Dozy : Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.

EI2 : Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960－2009.

Lane : Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863-1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.

### 史料・史料訳注

クルアーン（井筒訳）：『コーラン』井筒俊彦訳，改版。全3冊，岩波書店〈岩波文庫〉，1964年。

クルアーン（藤本他訳）：『コーラン』藤本勝次他訳。全2冊，中央公論新社〈中公クラシックス〉，2002年。

- クルアーン（三田訳）：『日垂対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳]，改訂版，日本ムスリム協会，1982年。
- ハディース（ブハーリー）：[ブハーリー]『ハディース』牧野信也訳，全6巻，中央公論新社〈中公文庫〉，2001年。
- ムハンマド伝：イブン・イスハーク著，イブン・ヒシャーム編注『預言者ムハンマド伝』後藤明他訳，全4冊，岩波書店，2010－2012年。
- シャリーアによる統治：イブン・タイミーヤ『シャリーアによる統治——イスラーム政治論——』湯川武・中田考訳，日本サウディアラビア協会，1991年。
- 統治の諸規則：アル＝マーワルディー『統治の諸規則』湯川武訳，慶應義塾大学出版会，2006年。
- Asmā' / Haddad : Allah's names and attributes (al-Asmā' wa al-ṣifāt by Aḥmad b. al-Ḥusayn al-Bayhaqī): excerpts.* Trans. Gibril Fouad Haddad. Fenton, MI: As-Sunna Foundation of America, 1999.
- Dāris* : al-Nu'aymī, 'Abd al-Qādir, *al-Dāris fī tāriḥ al-madāris*. Ed. Ġa'far al-Ḥasanī. 2 vols. al-Qāhira: Maktabat al-Ṭaqāfa al-Dīniya, 1988.
- Ḥiṭaṭ* : al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn Aḥmad b. 'Alī. *al-Mawā'iz wa-al-i'tibār fī dīkr al-ḥiṭaṭ wa-al-ātār*. Ed. Ayman Fu'ād Sayyid. 5vols. London: al-Furqān Islamic Heritage Foundation, 2002－2004.
- Ṭabaqāt / Subkī* : al-Subkī, Taḡ al-Dīn 'Abd al-Wahhāb b. 'Alī. *Ṭabaqāt al-ṣāfi'iya al-kubrā*. Ed. Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī et al. 10vols and index volume. al-Qāhira, 1964－1976. Ġiza: Haḡr, 1992.

## 研究

- 池田修「イスラム世界の教育」板垣雄三編『イスラム・価値と象徴』〈講座イスラム4〉筑摩書房，1986年：115－139頁。
- 菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ」『東洋学報』64巻1・2号（1983年）：131－176頁。
- 菊地達也『イスラーム教「異端」と「正統」の思想史』講談社〈講談社選書メチエ〉，2009年。
- 佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』山川出版社，1986年。
- 堀井聡江『イスラーム法通史』山川出版社，2004年。
- 柳橋博之『イスラーム家族法——婚姻・親子・親族——』創文社，2002年。
- al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Ta'rif bi'l-muṣṭalaḥ al-sharīf"*. 2vols. al-Karak: Mu'ta University, 1992.（『高貴なる用語』のテキストが収められている巻は「校訂」，作品研究の巻は「研究篇」と略称。）
- Ehrenkreutz, Andrew S. "Extracts from the Technical Manual on the Ayyūbid Mint in Cairo." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 15. 3 (1953): 423－447. Rpt. in *Monetary Change and Economic History in the Medieval Muslim World*. Ed. Jere L. Bacharach. [Aldershot], Hampshire: Variorum, 1992. XX.
- Hinz, Walther. *Islamische Masse und Gewichte*. Leiden: E. J. Brill, 1970.
- Le Tourneau, Roger. *Fez in the Age of the Marinides*. Trans. Besse Alberta Clement. Norman: University of Oklahoma Press, 1961.
- Stillman, Yedida Kalfon. *Arab Dress: from the Dawn of Islam to Mordern Times*. Leiden et al.: Brill, 2000.
- Tyan, Émile. *Histoire de l'organisation judiciaire en pays d'Islam*. 1938－1943. 2nd rev. ed. Leiden: E. J. Brill, 1960.